

“Karain: A Memory”における幻想の生成

後藤隆浩¹⁾

The Growth of the Illusion in “Karain: A Memory”

GOTO Takahiro

Abstract

In this paper, the narrative structure and the growth of the illusion in the text, Joseph Conrad’s “Karain: A Memory”, are analyzed through the close reading of the text. The function of the first narrator “I” in the third part of the text is important for readers. The first narrator “I” introduces the narration of Karain with the explanation of Karain’s motive for narration. Karain narrates his experience in the form of his recollection. Karain shows readers the process of the growth of illusion. Karain’s illusion is a psychological phenomenon. The force of this illusion has a great influence on Karain’s perception.

Keywords : narration, illusion, psychological phenomenon

I. 語りの主体の転換

Joseph Conrad の “Karain: A Memory” (1898) は、異文化接触の物語である。イギリスの商人達が、武器を中心とした交易により、東南アジアの前近代的地域共同体と接触する。西洋市民社会の視点から観察される土俗的共同体は、イギリス商人である「私」「私たち」に対して、独特な世界像を提示する。地域共同体の支配者カレインの現在の言動によって示される精神形態および彼の回想の語りの基底にある感覚や論理は、読者の意識を倫理、規範そして無意識といった問題領域へと導くものである。読者の意識は、テキスト内の「私」「私たち」とともに聴き手の側に移行して、カレインの回想の語りによって展開される物語における彼自身の精神形態の特殊性と普遍性に着目していくことになるだろう。

テキストの第一節から継続してきた「私」による一人称の語りは、第四節においてカレイン自身による回想の語りへと転換する。この語りの主体の転換は、単なるテキストの形

式上の機械的転換ではなく、物語内容の展開に即した必然性を伴ったものとなっている。第三節の終わりから第四節の始まりにかけてのテキストの様態においては、物語内容と物語言説とが密接に連動していると言えよう。

呪術的な力を備え、精神的な守護者となっていた太刀持ちの老人の死を契機として、カレインは「私たち」のスクーター船へ、精神的レベルにおける救済を求めて逃亡してくる。このようなカレインの自己の支配する共同体からの離脱という設定は、物語構造上必然的に、カレイン自身による回想の語りの導入部として機能する。カレインと「私たち」との間に構築された特殊な関係性が、カレインの語りの動機が実行に移される際の始動点となっている。カレインは「私たち」が、自分を極度に苦しめ続けている幻想の存在それ自体を、全く信じない者たちであるということ強調する。カレインは、自分と「私たち」との間には、原理的レベルにおいて精神形態の根本的な差異があることを自覚しているのである。そしてこのような、幻想の存在を信

1) 静岡産業大学経営学部
〒438-0043 静岡県磐田市大原1572-1

1) School of Management, Shizuoka Sangyo University
1572-1 Owara, Iwata, Shizuoka, 438-0043, Japan.

じない「私たち」と場所および時間を共有することによって、幻想の存在からの影響を遮断して、自己の過去における極限的体験についての回想を語り始めるのである。

カレインの回想の語り場となるスクーター船の船室は、夜の静寂の世界の中に位置していた。この静寂の雰囲気において、カレインの語りを受容する語り場が形成されていくのである。テキスト第三節の語りの主体である「私」は、船室内に語り場が生成し始めた時点で心的現象を次のように語る。

We waited. The wind and rain had ceased, and the stillness of the night round the schooner was as dumb and complete as if a dead world had been laid to rest in a grave of clouds. We expected him to speak. The necessity within him tore at his lips. There are those who say that a native will not speak to a white man. Error. No man will speak to his master; but to a wanderer and a friend, to him who does not come to teach or to rule, to him who asks for nothing and accepts all things, words are spoken by the camp-fires, in the shared solitude of the sea, in riverside villages, in resting-places surrounded by forests—words are spoken that take no account of race or colour. One heart speaks—another one listens; and the earth, the sea, the sky, the passing wind and the stirring leaf, hear also the futile tale of the burden of life.¹⁾

語り場における語り手カレインと聴き手「私たち」との間には、ある種の共通感覚というものが生成していたものと思われる。カレインは、自己の過去の体験を言説化し、語り始めようとする。「私たち」は、カレインの精神形態における語り出す直前の心的過程を察知し、カレインが語り始めるのを期待した。一方カレインの心的過程においては、彼の精神形態の基層領域に内在化している原的体験のイメージが、「私たち」聴き手の期待の心的構造に引き寄せられて、具体的な構造

を有する体験談として言説化され、語り始められたものと思われる。

なぜカレインは、異民族である「私たち」を自己の語りの聴き手として選んだのか。「私」は改めて、カレインと「私たち」との関係性が、この語り場におけるカレインの語りを可能にしたことを、「私」の語りにおいて確認している。カレインの属する前近代的地域共同体においては、内部の公的な人間関係の基本構造は、支配と被支配の関係を主軸としたものになっている。カレイン自身がその地域共同体の支配者という立場にあるため、共同体内部において、カレインが支配と被支配の関係性以外の関係性を形成することは、極めて困難なことであったと思われる。カレインは地域共同体内部において、語り場を持つことはできなかった。このようなカレインの心的過程において、共同体からの離脱、逃亡という行為は、必然的な帰結であったと言えるだろう。

さらに「私」は、語り場が形成され、語りという行為が発動する条件について、一般的レベルでの考察を語っている。「私」が具体例としてあげている語りが行われる場所は、「海辺」「川岸の村」「森にかこまれた休憩所」である。これらの例示された場所はすべて、周辺的な位置にある。中心的共同体から地理的に離れ、共同体内部の人間関係からも離れ、孤独な状態となることを可能にする場所である。そして聴き手として想定されているのは、「放浪者」「友人」といった、共同体からの離脱者あるいは共同体内部の公的關係性から離れた存在である。

また読者は、ここでの「私」の考察において、一般的な語り場における語る行為の発生の原的イメージとして、「たき火」が使われていることにも十分に留意する必要があるだろう。たき火を囲みながらの語り場の形成は、歴史的パースペクティブにおける語りの発生へと読者の意識を導くものであろう。テキストの物語内容レベルにおいて、聴き手である「私たち」はカレインの回想の語りを、彼の精神形態の基層における語る動機メカニズムの言説化、表現として受容しようとしてい

ると言えよう。

テキスト第三節の最終段落において、「私」はカレインの語りの特質について説明する。「私」は聴き手として、カレインの語る体験談の基層に、語りの原質といったものを感知したものと思われる。

He spoke at last. It is impossible to convey the effect of his story. It is undying, it is but a memory, and its vividness cannot be made clear to another mind, any more than the vivid emotions of a dream. One must have seen his innate splendour, one must have known him before — looked at him then. The wavering gloom of the little cabin; the breathless stillness outside, through which only the lapping of water against the schooner’s sides could be heard; Hollis’s pale face, with steady dark eyes; the energetic head of Jackson held up between two big palms, and with the long yellow hair of his beard flowing over the strings of the guitar lying on the table; Karain’s upright and motionless pose, his tone — all this made an impression that cannot be forgotten. (pp. 26-27)

「私」は、カレインの回想の語りの聴き手、受容者として、語りを聴く経験の直接性が生む効果について述べている。カレインの語る行為それ自体が生み出す雰囲気、効果、印象といったものの臨場感を、その場に不在の他者に間接的に伝達することは不可能であろう。そのような意味で、カレインの語りによって生成されるイメージは、一般的なレベルでの夢の構造に類似する。夢の内部に生成する雰囲気それ自体を、夢の外部、現実の感覚レベルにおいて、言語によって現象化させ再現させることは極めて困難なことである。

「私たち」にとってカレインの語りを聴く場は、カレインとの間の共通感覚を基盤とした特権的なイメージの場所である。物語内レベルにおいて、「私たち」はカレインの語り口を直接的に受容し、彼の語りによって生み

出された印象を特権的に感受したのである。そして読者は、続く第四節から始まるカレインの回想の語りのテキストの読解過程において、テキスト内レベルでの語りの受容における直接性、聴覚的イメージの現象化の可能性を現実レベルにおいて追体験することになるのである。

II. 原的幻想の生成過程

テキスト第四節のカレインの回想の語りにおいては、カレインが過去に経験した出来事の経緯が、時間の流れに沿って読者に提示されていく。それによって、現在カレインの精神に苦悩を与え続けている幻想の存在の起源が明確化する。幻想の存在の正体は、カレインが意図することなく命を奪ってしまった同じ部族内の友人マターラであった²⁾。友人の不条理な死という結末を引き起こした事件の発端は、カレイン、マターラの住む土地へ、ひとりのオランダ人の交易商人が入植したことである。マターラの妹が、このオランダ商人と一緒に住み始めたのである。

“Then Pata Matara’s sister fled from the campong and went to live in the Dutchman’s house. She was a great and wilful lady: I had seen her once carried high on slaves’ shoulders amongst the people, with uncovered face, and I had heard all men say that her beauty was extreme, silencing the reason and ravishing the heart of the beholders. The people were dismayed; Matara’s face was blackened with that disgrace, for she knew she had been promised to another man. Matara went to the Dutchman’s house, and said, ‘Give her up to die—she is the daughter of chiefs.’ The white man refused and shut himself up, while his servants kept guard night and day with loaded guns. (pp. 29-30)

地元の共同体内において高い身分の女性であるマターラの妹とオランダ商人との間に、ど

のような経緯でエロス関係、対幻想が生じたのか、その詳細はテキスト化されていない。二人の間のエロス関係、対幻想の生成過程においては、おそらくオランダ商人の持つ政治的、経済的、文化的な力と、マターラの妹の高い身分が彼女に与える自由な力の行使の可能性とが共鳴したのではないかと多くの読者は推測するだろう。

マターラの妹は、部族内での婚姻の約束を破棄してオランダ商人と暮らし始めたのである。西洋市民社会とは原理的に異なる地域共同体内において、とりわけマターラの妹のような高い身分の女性の婚姻は、社会的に極めて重い意味と価値を付与されたものであるだろう。この婚姻は共同体内部の原理に基づいた、共同体存続のための価値を有する象徴的社会現象であると言えよう。マターラの妹の婚姻の約束の破棄は、共同体全体の名誉を傷つける行為であった。

そもそもこのような前近代的段階にある地域共同体への西洋市民社会からの異民族の入植は、一般に文化的摩擦によって、共同体の原理に亀裂を生じさせる可能性を内包しているものであろう。このオランダ商人の入植にあたっては、権利や保護等に関する条件に基づいて、交易という限定的な目的においてのみ、共同体内での生活が保障されていたものと思われる。オランダ商人とマターラの妹との間に生じた関係性は、共同体の原理的規範に抵触するものであった。マターラは、共同体の原理的価値に基づいて、族長の娘である妹の死を求めたのである。

カレインは、かつて一度マターラの妹の姿を目撃している。彼女の姿は極めて美しく、彼女を見る者の理性を沈黙させ、心を夢中にさせるほどであるというのが共同体内の人々の一致した印象である。彼女の美貌は、他者の心に対して極めて魅惑的な影響を及ぼすものであった。このようなマターラの妹の魅惑的な美の印象が、後にカレイン自身の心的現象において、強度の幻想として生成していくのである。

オランダ商人がマターラの妹を地元共同体の側へ返還することを拒否し、防備の態勢を

とったことにより、マターラは激怒し、共同体内における両者の緊張状態が高まる。

Matara raged. My brother called a council. But the Dutch ships were near, and watched our coast greedily. My brother said, 'If he dies now our land will pay for his blood. Leave him alone till we grow stronger and the ships are gone.' Matara was wise; he waited and watched. But the white man feared for her life and went away.

"He left his house, his plantations, and his goods! He departed, armed and menacing, and left all—for her! She had ravished his heart! (p. 30)

オランダ商人とマターラ達土地の者との対立の背景には、オランダと地域共同体との間にある政治的、軍事的力関係の均衡の問題が存在していた。ある意味、このオランダ商人とマターラの妹との間の関係性の問題は、女性の存在を媒介として、オランダと地域共同体との間に傾斜的に成立している政治的、経済的関係性の力学の基本構造を象徴的に指し示していると言えよう。

最終的にこのオランダ商人は、家、土地、商品といった経済的利権を放棄して、マターラの妹を連れてこの土地を去っていく。マターラの妹に魅了されたオランダ商人は、その心的現象において、社会的、経済的領域ではなく、個的領域、対幻想的領域において価値判断を行ったのである。交易商人として入植したこのオランダ人の共同体内における位置からすると、このような判断は、ある種の価値基準の転倒であるとも言えよう。オランダ商人の意識においては、交易を目的として地域共同体内へ入植した際に、異民族である地元住民と自己との間に、心的な境界線が設定されていたことであろう。この境界線を、マターラの妹との間に生成した対幻想の排他的な力が、限定的に無効としたのである。

かくしてオランダ商人と妹の征討を決意したマターラと彼に加勢したカレイン二人の追

跡の旅が始まる。この旅での時間の経過において、カレインの意識内にはマターラの妹に対する幻想が生成してくる。この幻想の生成は、過剰なまでの恐怖という精神的病理性に苦しむ現在のカレインの運命の物語展開の起点となっている。現在のカレインを苦しめ続けているマターラの幻想を生む彼の不条理な死の原因となったのが、このマターラの妹に対する幻想である。その意味で、このカレインのマターラの妹に対する幻想は、原的幻想と言うべきものであろう。この原的幻想は、女性に対する変形した過剰な対幻想であった。

祖国を出発したマターラとカレイン二人の追跡の旅の舞台は、異国ジャワへと移る。出発当初の予測に反して、オランダ商人とマターラの妹を容易に見つけだすことはできず、探索は難航の様相を呈してくる。異国の地において身体的、精神的に苦しい状態が続く中、マターラとカレインの意識は、過度にオランダ商人とマターラの妹二人の存在にのみ集中し始める。

Nothing dismayed us. And on the road, by every fire, in resting-places, we always talked of her and of him. Their time was near. We spoke of nothing else. No! not of hunger, thirst, weariness, and faltering hearts. No! we spoke of him and her? Of her! And we thought of them—of her! Matara brooded by the fire. I sat and thought and thought, till suddenly I could see again the image of a woman, beautiful, and young, and great and proud, and tender, going away from her land and her people. (p. 32)

マターラとカレインは、探索の対象であるオランダ商人とマターラの妹のことだけを話す状態となっていた。「空腹」「のどの渴き」「疲労」「心の弱まり」といった身体的、心的感覚に関しては、あえて言語化しなかったのである。常にオランダ商人とマターラの妹を言語化することにより、カレインの関心は、こ

の二人、そして彼女へとしぼり込まれていく。このような過剰とも言える目的志向性による極度な関心の集中は、やがてカレインの精神のバランスを崩し始めたものと思われる。カレインは、マターラの妹のことだけを考えるとこの心的行為を反復し徹底化していくのである。

テキスト内の情報によれば、カレインは以前マターラの妹の姿を目撃したことはあるが、彼女の内面に接するレベルでの交流はなかった模様である。内面を知らない人物の外面的イメージのみに関心、思考の対象として徹底化していけば、やがてそのイメージの重層化、変容、強迫観念化といった心的現象が生じ得るだろう。突然カレインの意識において、マターラの妹の姿が現象化する。カレインの精神機能における微妙な不調によって、視覚的イメージのレベルで幻視が生じてきたものと思われる。

マターラの妹の姿の強力なイメージは、やがてカレインの知覚全般に影響を及ぼし始める。女性の顔がすべてマターラの妹の顔に見えてきたのである。

At last in every woman's face I thought I could see hers. We ran swiftly. No! Sometimes Matara would whisper, 'Here is the man,' and we waited, crouching. He came near. It was not the man—those Dutchmen are all alike. We suffered the anguish of deception. In my sleep I saw her face, and was both joyful and sorry. . . . Why? . . . I seemed to hear a whisper near me. I turned swiftly. She was not there! And as we trudged wearily from stone city to stone city I seemed to hear a light footstep near me. A time came when I heard it always, and I was glad. I thought, walking dizzy and weary in sunshine on the hard paths of white men—I thought, She is there—with us! . . . Matara was somber. We were often hungry. (p. 33)

カレインの心的現象においては、マターラの

妹の容姿のイメージが、現実の女性の姿に投影されていく。彼の視覚においては、視界に入る女性の顔が、マターラの妹の顔のイメージへと変容する。また彼女の顔のイメージは、カレインの睡眠時には、おそらく夢の中の視覚として現象化しているのである。さらにマターラの妹の幻想は、聴覚のレベルにおいては、「ささやき声」や「足音」としてカレインの意識に現象化する。そしてカレインは、視覚および聴覚のレベルにおいてマターラの妹の幻想のイメージを知覚することにより、彼女が自分のそばに存在しているという感覚を持ち始める³⁾。このようにしてマターラの妹の幻想は、カレインの心的構造の無意識のレベルに影響を及ぼすほど強力なものへと変容していくのである。

Ⅲ. 現実と幻想の交錯

マターラの妹の幻想が、彼女の姿、声、足音といった具体性のある現象として知覚され始めた段階においては、カレインの意識の中で、現実のレベルと幻想のレベルとは、分離されていたものと思われる。幻視、幻聴といった現象が、自己の意識においてのみ現象化しているということ、カレイン自身はおそらく自覚していたはずである。しかしながらカレインの意識においてマターラの妹の幻想は、徐々にその強度を増大させていき、現実レベルの感覚と幻想レベルの感覚との間に設定されていた心的な境界線が、曖昧化してきたものと思われる。

ジャワを去った後、探索を続行するマターラとカレインの旅は、さらなる苦難の連続であった。こうした身体的および精神的な疲労が蓄積していた状態は、カレインの意識におけるマターラの妹の幻想に対する親和感を強める方向に作用したであろう。そしてついにカレインの意識においては、マターラの妹の幻想が存在感のあるイメージとして現象化し、彼が知覚している現実世界の感覚と交錯し始めるのである。カレインは、自己の心的状態を次のように回想する。

I said nothing; but I saw her every day—

always! At first I saw only her head, as of a woman walking in the low mist on a river bank. Then she sat by our fire. I saw her! I looked at her! She had tender eyes and a ravishing face. I murmured to her in the night. Matarara said sleepily sometimes, 'To whom are you talking? Who is there?' I answered quickly, 'No one' . . . It was a lie! She never left me. She shared the warmth of our fire, she sat on my couch of leaves, she swam on the sea to follow me. . . . I saw her! . . . I tell you I saw her long black hair spread behind her upon the moonlit water as she struck out with bare arms by the side of a swift prau. (p. 34)

カレインの意識においては、マターラの妹の姿が見えるという幻視の現象が常態化していく。その現象においてマターラの妹の幻想は、具体的な身体動作を示している。さらに読者は、カレインが彼女の幻想の姿の表情まで感知していることに留意する必要がある。「優しい目」「魅惑的な顔」といった表現が示すように、カレインの心的構造はマターラの妹の幻想に対して、自己の繊細な感覚を言語表現に投影するほど深いレベルで反応しているのである。

マターラの妹の幻想は、カレインの意識内における固有の現象であり、当然のことながら現実世界の客観的レベルにおいては現象化しない。マターラが妹の幻想を、カレインとともに共通感覚として知覚することはあり得ない。しかしながら、カレインが夜の時間帯にマターラの妹の幻想に低い声で話しかけることにより、この幻想が現実の客観レベルに侵入する。カレインの低い声を聞いたマターラが「誰に話しているのか」「誰がそこにいるのか」と問いかける。カレインは「誰もいない」と答えるが、このようにマターラとカレインとの間に、現実の客観レベルにおいて何者かの在、不在を問う会話が発生したことが重要である。またマターラの妹の幻想が、「たき火の暖かさ」を共有したという表現にも留意する必要がある。カレインは「暖かい」

という自己の感覚を幻想の存在に投影し、マターラの妹の感覚として言説化しているのである。マターラの妹の幻想は、マターラには感知されないが、彼とカレインとの間に存在する力として生成し、その後の物語展開における二人の運命に決定的な影響を及ぼすことになるのである。

カレインは、さらに回想を続けてマターラの妹の幻想の印象を次のように語る。

She was beautiful, she was faithful, and in the silence of foreign countries she spoke to me very low in the language of my people. No one saw her; no one heard her; she was mine only! In daylight she moved with a swaying walk before me upon the weary paths; her figure was straight and flexible like the stem of a slender tree; the heels of her feet were round and polished like shells of eggs; with her round arm she made signs. At night she looked into my face. And she was sad! Her eyes were tender and frightened; her voice soft and pleading. Once I murmured to her, ‘You shall not die,’ and she smiled . . . ever after she smiled! . . . She gave me courage to bear weariness and hardships. Those were times of pain, and she soothed me. We wandered patient in our search. We knew deception, false hopes; we knew captivity, sickness, thirst, misery, despair . . . Enough! We found them! . . .”

(pp. 34-35)

ここでカレインの回想の語りは、いったん短く中断する。テキストの語りの主体が「私」へと転換して、短い「私」の語りが入った後に、カレインは語りを再開する。上記のカレインの語りによって読者は、カレインの意識においてマターラの妹の幻想が、どの程度まで強力に増大したのかを理解することができるだろう。カレインは以下において確認する心的状態において、現実のマターラの妹に遭遇することになるのである。

カレインの意識においてマターラの妹の幻想は、母国語で彼に話しかけてきた。異国を旅するマターラとカレインにとって二人の関係性は、唯一故郷の言葉を交わすことのできる親密な閉じたものとなっている。現在彼らは異国の地において、言語環境的に疎外された状況にある。カレインの意識においてマターラの妹が故郷の言葉で話しかけてくるという幻想は、彼自身の無意識の願望に基づいた極めて自然な心的現象であったと思われる⁴⁾。カレインはマターラの妹の幻想を、自分だけが特権的に感知できるものとして心的に独占する。さらに留意すべきことは、マターラの妹の幻想が単にカレインから「見られる」「聴かれる」という受動的な形態ではなく、彼女の方からカレインに対して働きかける能動的形態を示していることである。彼女は「合図」をし、カレインの顔を「のぞき込み」「嘆願するような声」を発した。

そしてついにカレインはマターラの妹の幻想に対して「あなたを死なせない」と話しかける。それに対して彼女は微笑を示したのである。すべてはカレインの意識内において現象化した幻想としての出来事ではあるが、この時点においてカレインは、相反する二重の目的を心的に内在化させたことになる。マターラとの誓いに基づきマターラの妹の命を奪うことと、マターラの妹の幻想との誓いに基づきマターラの妹の命を守ること、この矛盾した二つの目的を両立させるためには、現実のレベルと幻想のレベルを厳格に区別しなければならない。マターラの妹の助命は、あくまでも幻想の領域内のイメージとして禁圧しなければならなかったのである。

実際にオランダ商人とマターラの妹を発見し所期の目的を果たそうとした際に、カレインの心的構造においては「マターラの妹の助命」という禁じられた幻想が発動し、結果的にマターラの不条理な死という事態が生じたのである。そして読者はその場面において、無意識の問題領域の存在を確認することになるだろう。この問題は、継続課題として稿を改めて考察することにする。

(注)

- 1) Joseph Conrad, “Karain: A Memory” *Almayer’s Folly and Tales of Unrest (Collected Edition of the Works of Joseph Conrad; London: J.M. Dent and Sons, 1947), p. 26.* 以下引用はすべてこの版により、本文の括弧内に頁数を示す。
- 2) Conrad の “An Outpost of Progress” においては、異郷の地において孤立した二人の人物の間に争いがおこり、一人が不条理な死を与えられる。孤立的に二人だけで存在することの心的病理が、友人の一方が他方の命を奪うという結果を導いている。
- 3) 『縮刷版 精神医学事典』(弘文堂、2001年)の「同伴者の幻覚」の項においては、次のように説明されている。「自分のかたわらに他人の姿を見る幻視。」「幻視像は一般に無言だが、考察察知や思考干渉を伴う場合もある。患者の庇護者あるいは心の支え、恋愛相手として登場することが多く、願望充足の要素を含む。」
- 4) Conrad の “Amy Foster” においては、海難事故によって言葉の全く通じない異郷の地に上陸した生存者ヤンコーの心的過程が描かれている。言葉が通じない環境における疎外感は、祖国ポーランドから離脱し、イギリスに帰化した Conrad にとって根源的な感覚であったと思われる。